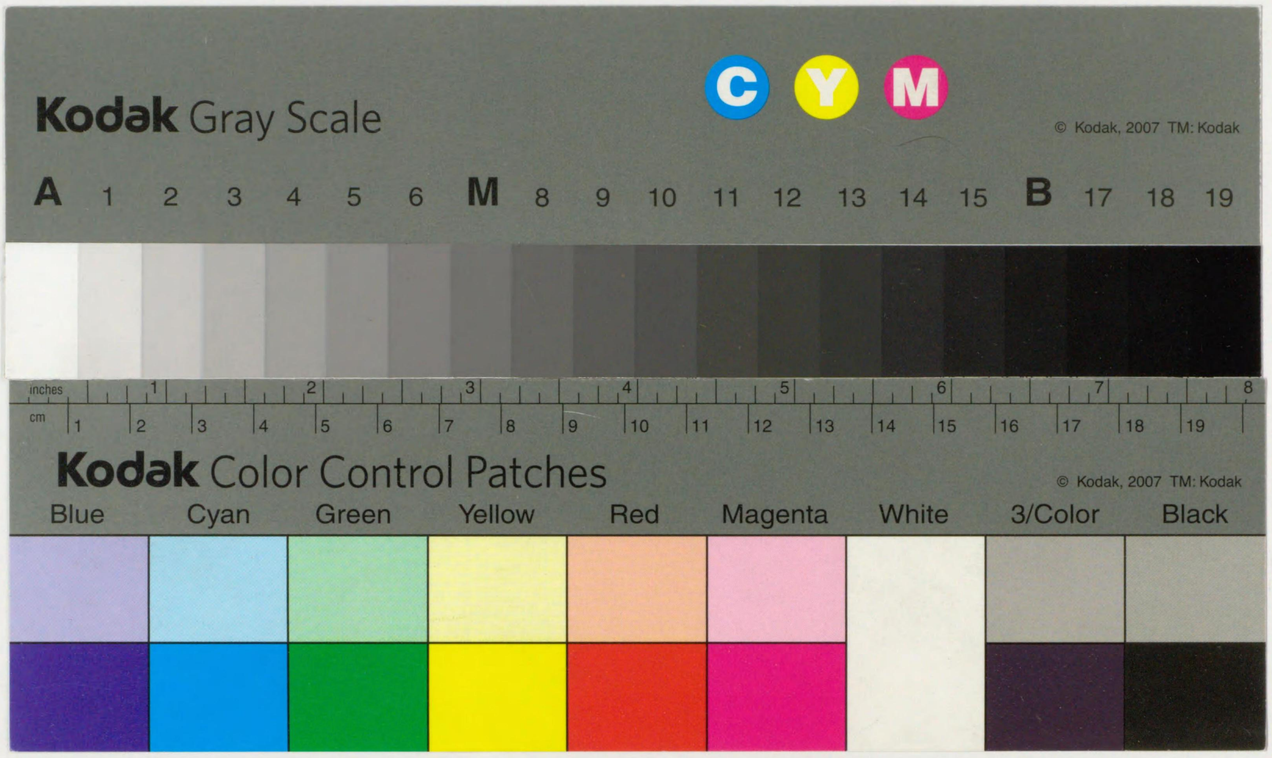
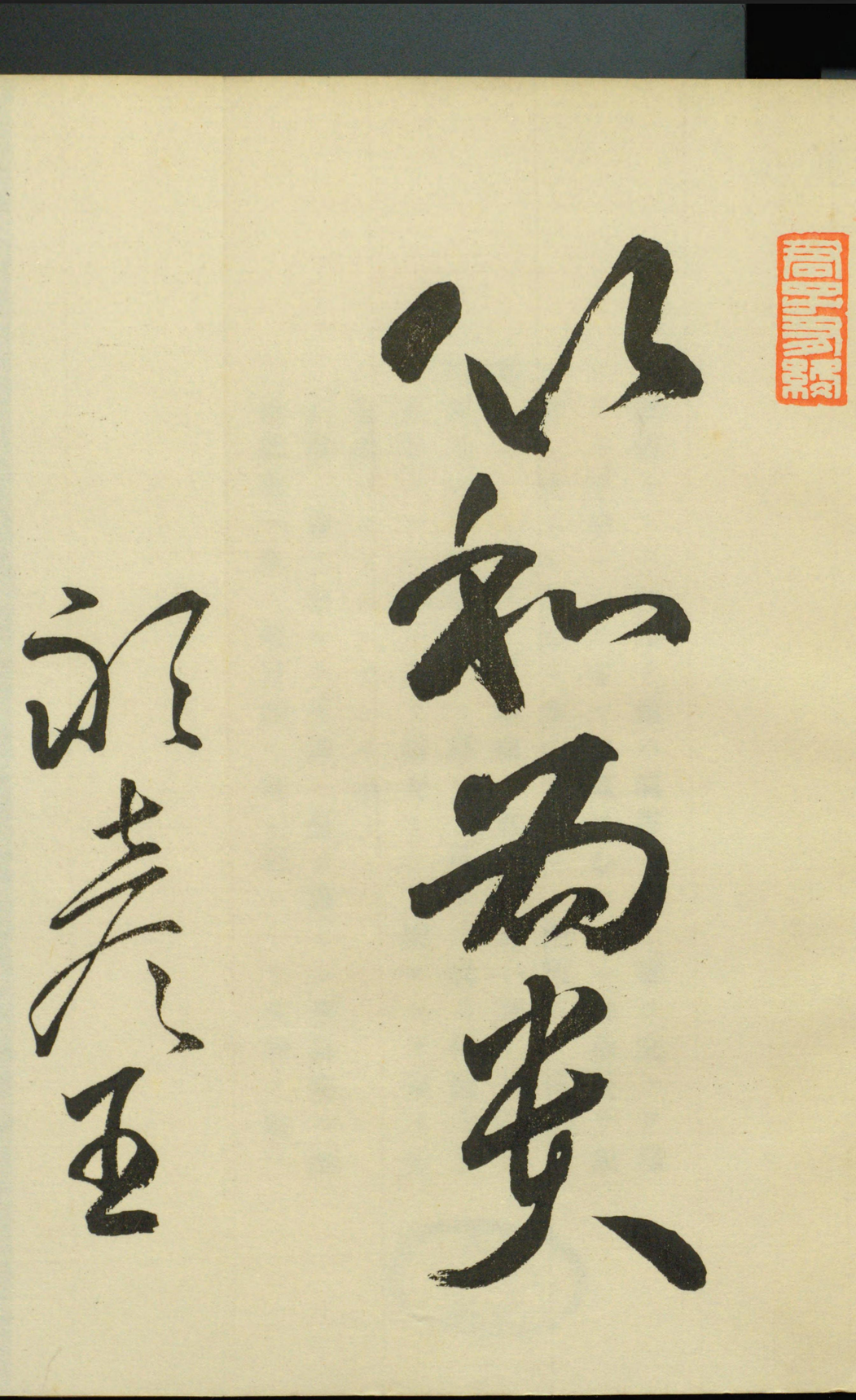


162
73
162-73
I2008001008l9

和

聖靈 讃 香



以和為貴

謝春王

162-73

序

『識洞ニシテ機深ク、量ハ瀛海ヲ包ミ、徳ヲ立テテ器ナラズ、至功ニシテ宰セズ、寛綽心ヲ居シ、温恭性ヲ成ス。時ニ循ヒテ孝友ニ、率由スルコトアリテ、恵和聖ニ齊シ。』是レ梁ノ王筠ガ昭明太子ヲ讃歎シタル語ナリ。移シテ我ガ聖徳太子ニ充用スルモ、誰カ之ヲ溢美ナリト謂ハンヤ。却テ其ノ未、悉サザルモノアルヲ念フ。

『仁聖ノ姿ヲ稟ケテ、生知ノ量ヲ縦ニシ、孝敬兼ネ極メ、温恭躬ニ在リ。明月西ニ流レ、幼ニシテ文章ノ敏ア

大正 12.3.19 内交

リ、羽籌東ニ序シテ、長ヘニ元良ノ德ヲ備フ。』是レ梁ノ簡文帝ガ昭明太子集別傳等ヲ上ルノ表ニ出ヅル詞ナリ。亦以テ轉ジテ我ガ太子ニ該當セシムルモ、誰カ之ヲ訣辭ナリト謂ハンヤ。寧、其ノ未、足ラザルモノアルヲ感ズ。

我ガ太子薨ゼラレシヨリ一千三百年、我ガ邦歷世ノ景慕欽仰、愈深ク益厚クシテ、其ノ盛德ヲ推稱シ、其ノ偉業ヲ讃仰シ、發シテ文辭ト爲リ、傳ヘテ背誦ニ上ルモノ多シト雖、必、其ノ肯綮ニ中ルモノ太希ナリ。而モ昭明太子ノ德音頌聲、尙、未、資リテ以テ我ガ太子ノ

全豹ヲ推スニ足ラザルヲ如何スベキ。

辛酉ノ春、太子一千三百年御忌トシテ、大和法隆寺、河內叡福寺、播磨斑鳩寺、及、同鶴林寺ニ嚴修セラレタル、莊嚴絢麗ヲ極メシ式典ヲ記念シ、茲ニ太子ノ手澤ヲ經、太子ノ意圖ニ成レル至珍至寶ヲ擇ビテ、之ヲ照相ニ收メ、以テコノ一帖トナシ、題シテ聖靈遺香ト曰フ。洵ニ太子ノ當時ヨリ今ニ至ルマデ、悠久ナル歲月ノ間、能ク鬼呵神護ヲ得テ、依然其ノ舊觀ヲ存スルノ遺物遺什是レナリ。之ヲ閱スルモノ、坐ニ太子在世ノ當年ヲ憶ヒ、颯爽溫雅ナル風丰ヲ、面リ拜スルノ想ア

リ。

未、必シモ、一千三百年ヲ閲シテ、尚、且、太子ヲ讃仰歎美スルノ語、能ク人ヲシテ首肯セシムルモノ希ナルヲ憂ヘズ。未、必シモ、昭明太子ノ徳音頌聲ヲ假リテ、我ガ太子ノ盛徳偉業ヲ況フルノ要アルヲ見ズ。言ナキノ讃辭、聲ナキノ歎美ハ、自、此ノ一帖ノ中ニ満ツ。實ニ此レ無言ノ雄辯ナリ。太子ノ遺物遺什、皆默シテ語ナク、語ナクシテ而モ其ノ聲雷ノ如シ。此ノ帖ヲ展觀スルモノ、幸ニ太子無言ノ雄辯、其ノ聲雷ノ如キヲ、聽取スル所アランコトヲ望ム。

若夫レ、太子ノ精神ト徳澤トガ我ガ國民ノ品性ト事業トノ上ニ繼承セラレテ、其ノ感化千載ニ及ブモノアルニ至リテハ、豈翅ニ、其ノ聲雷ノ如キノミナランヤ。此ノ帖ヲ作ルノ意、亦ココニ存ス。

大正十一年四月十一日

聖徳太子一千三百年御忌奉賛會

會長侯爵 徳川頼倫識

帝國圖書館藏

聖靈遺香解説

一、法隆寺伽藍外観

推古天皇及び聖徳太子の本願御造營にかゝる、世界最古の木造建築にして、又本邦無比の名刹なり。足一たび此の靈域を踏み、聖靈院の池畔に立ちて翠松の間より堂塔を仰ぎ視れば、坐ろに崇高の感に打たれずんばあらず。

二、聖靈院

古くは聖皇殿または豐聰殿とも稱す、聖徳太子を奉祀せる靈殿にして金堂、五重塔を圍繞せる廻廊外の東側に在り、建築は鎌倉初期のものなれども、其樣式と裝飾と相待つて頗る優雅を極め、參拜者をして隨喜の情に堪へざらしむ。

三、聖靈院本尊木彫聖德太子坐像

御像は高さ二尺七寸五分、朱華の彩色を施し、威容端嚴眞に聖者の相を具へ給ふ、御歳四十五の御影と傳へらる。太子御像中最も傑出せるものにして、天仁年間の作なるべし。本像胎内には金銅救世觀音と、勝鬘、維摩、法華、三部の寫經とを奉安せり。

四、聖靈院木彫地藏菩薩立像

足利時代に聖皇曼荼羅を撒して、此地藏尊を金堂より請じ安置したるものなり。高さ二尺五寸四分、蓮座の高九寸三分、白檀木の一木造にて平安朝初期の作なるべし。蓮華座の胡桃形反花の遒美なるは他に比類を見ず。

五、中門

法隆寺草創當時の建築にして、樣式の自在なるのみならず、各部の均衡整正なる點に於て勝る。桁行三十九尺八寸、梁間二十八尺二寸。門内左右の金剛力士は和銅四年の塑像にして、寺門擁護の金剛形中本邦最古の遺品なり。

六、廻廊

古今目錄抄に、總長七十八間、東四十間、西三十八間、講堂東西各七間、外陣柱みな連子あり、東西に樂門西東の廊の北南共に脇門、講堂の西東際に脇戸ありと。略ぼ現形に符合す。其適度なる廣高を保ちて。伽藍の統一的美觀を爲すもの是れなり。

七、金堂

中門、廻廊、五重塔と共に一千三百有餘年の星霜を閱せる創建時代のものにて、七堂伽藍の主腦たり。その重層建築の初層は桁行四十五尺九寸、梁間三十五尺三寸なるが上層は共に十三尺を減し、鞏拔の觀を著くするのみならず安定の意を恣にす。

八、金堂本尊金銅藥師如來坐像

金堂奉安諸佛像中最古のものたり、用明天皇の御願を果し參らすべく、推古天皇さ共に聖德太子の造立し給ひしものにして、實に是れ金堂の本尊なり。全長二尺七分、その手法北魏に則りて最も整美を極む。

九、金堂本尊金銅藥師如來坐像光背銘文

本邦造佛の緣起を錄して光背に鐫せる最初のものなり。其意義の明瞭にして事件の莊重なる、其年代の精確にして記文の詳細なる、單に造佛銘中最秀なるのみならず、法隆寺造立の根本史料としても亦尊貴なるものとす。

一〇、金堂金銅釋迦如來坐像及兩挾侍立像

現に金堂の中央に安置するところのものにして、聖德太子の御病中、王后王子等諸臣と共に深く愁ひ、發願して太子等身の釋迦像を造立せるもの即ち是れなり。鳥佛師の謹作にかゝる、風貌端然として千古を照す。

一一、金堂金銅釋迦如來坐像光背銘文

本邦造佛銘中優秀なるものゝ一にして、釋迦像造立の由緒を明らかにするのみならず、是に據りて聖德太子の薨去が、推古天皇卅年壬午歲二月二十二日なるを證明し、日本書紀の辛巳歲とせる訛誤を正し得べき貴重なる史料とす。

一二、金堂木彫着色觀世音菩薩立像

古來一に虛空藏菩薩と傳へ、近時また百濟觀音と稱ふ、身長六尺九寸一分なり。本像は我が木彫中最も簡古なるものゝ一にして、成熟せる技術を撲素の體に包みたる上代作家の時代特色を窺ふに足るべし。

一三、金堂木彫着色多聞天王立像

身長四尺四寸四分北魏風を摸す、四天王四軀皆同時の作にして只だ作者を異にせるのみ、この像の光背には「藥師德保上而鐵師弖古二人作也」とあり、木造着色の尊像としては、恐らく佛敎國現存像中、最初のものと云はざるを得ざるべし。

一四、金堂木彫着色吉祥天立像

白河天皇の承曆二年十二月金堂に安置して開眼せるものなり。身長三尺八寸二分克く金光明最勝王經の指示に則りて其精神を傳へ、然かも藤原時代藝術の特色を發揮して餘すなきもの、同種の像中只だ是れあるのみ。

一五、金堂壁畫

圖は堂内四方の大壁なり。金堂内面東西南北大小十數壁、悉く四佛の刹土若くは諸尊の像を描き、以て眼前に淨土結界の眞相を現し、菩提成覺の樂しき曉を憧憬せしめんとす。夫の印度アジアンタの壁畫と共に實に世界的至寶たり。

一六、金堂天蓋飛天及鳳凰

堂内西の間に懸垂せる創立當時の遺品にして、二重の屋蓋を有し、配するに音聲飛天と鳳凰とを以てせる着色木造なり。幅七尺九寸、奥行七尺三寸、その古制を存し、その發達の由來を徵し得る點に於て、數多の天蓋中希世の逸品とす。

一七、金堂玉虫厨子

推古天皇の遺愛にして總丈七尺七寸、宮殿と須彌座とより成る總檜造にて、漆を塗り縁に透金具を伏せ、或は密陀僧を以て諸種の文樣を描き又圖像を畫けり、特に金具に伏せたる玉虫の羽は、今尚燦として光を放てるもの若干を存せり。

一八、金堂橘夫人念持佛厨子

高さ八尺須彌座、龕身、天蓋の三部より成る檜造にて樣式手法玉虫厨子に酷肖し、飛鳥時代の遺制を存すると共に多少優雅の風を帶びたり、只だ繪畫が唐代の新味を加へたるより推せば、恐らくは天武持統朝の頃の作なるべし。

一九、五重塔

塔は草創當時の建築にして三間五層より成り、九輪頂上まで實に百五尺二寸、その基軸の高さに比し屋蓋奮翩の度を緩く且つ大ならしめて安定し、每層の屋蓋は又出入大小替代して均一ならず、以て全景に莊重の感を與へ伽藍配置の妙を極む。

二〇、五重塔塑着色菩薩坐像

塔内刹柱の四方に安置せる群像の一にして高一尺三寸四分、着彩泥塑より成る、世に塑像の遺存するもの無きに非ざるも、唐風の長を參して端嚴かくの如きは、決して塔内の外に求め難し、和銅四年の造なりと言ふ。

二二、五重塔塼維摩居士坐像

鬚髯を立體にするは古來藝術家の惱めるところ、此像相對照して造られたる文殊像よりも、その鬚髯長き白髮の居士の相貌に於て製作上の苦心の痕を認め得べし。蓋し維摩像中最古の立體彫刻としては此の像を推さゞるべからず。

二三、講堂

大衆會合の堂なれば、法隆寺伽藍中その廣大なるに於て第一とす。桁行百十一尺、梁間十九尺、棟高八十尺四寸を算せり。藤原初期の建築にして京都普明寺の堂宇を移せるものなり。些々たる手法を弄せざる處に却つて雄大の致を存す。

二三、講堂本尊木彫漆箔藥師如來坐像

像の高八尺六寸挾侍の日光月光兩菩薩の高五尺七寸四分、何れも同手法にして藤原初期の三尊像としては當に第一位たるべし。總べてこれ慈悲忍辱身中に剛健勇猛の相を藏し、所謂定朝式圓滿の境に入らざる過渡の樣式を示すを以て名あり。

二四、夢殿

東院の地は聖德太子の宮居し給ひたる斑鳩宮趾なり。太子寢殿に近く一宇の淨室を建立し默想禪觀の道場となし給ひし處に當り、天平十一年大僧都行信八角圓堂を造營せり、夢殿是なり。即ち夢殿の稱は夢想三昧定の意より起ると傳へらる。

二五、夢殿本尊木彫漆箔觀世音菩薩立像

法隆寺諸佛像中甚深の由緒を有するはこの本尊なり。身長五尺九寸五分、聖德太子御在世中その御身長に象りて造像せられたるものなりといふ點に於いて、一入生身の太子に奉仕するの感を深くし、敬虔の情禁ずる能はざるものあり。

二六、相殿木彫着色聖德太子七歲御影

繪殿の北隅にある一室を相殿と稱し、この像を奉安す。聖武天皇初めて聖靈會を勅修あらせられし時の勅作本尊に則る、治暦五年僧圓快の作なり。爾來法會毎に講堂に請じて本尊とす、聖容溫和にして而も威靈を存し、人をして覺えず渴仰せしむ。

二七、繪殿金銅觀世音菩薩立像

夢違觀音と稱し、往古より惡夢を轉じて吉夢となすとて祈願せらる。臺座共高二尺九寸年代未詳なれども、其形式よりして將に純唐藝術に移らんとする頃の作とすべきか眉目整美吻唇微笑を漏らし、慈悲忍辱の情陰約の間に躍然たり。

二八、綱封藏絹本着色聖德太子孝養御影

綱封藏は寺傳の靈寶を藏する處、古來勅封なりしが後改めて綱封とす、此御影は聖德太子が父帝の不豫にお在せし時、御腦平癒の祈願を籠めさせ給へる記念像にして孝養の御影と稱す、或はまた太子傳曆に基き十六歲の御影ともいふ。

二九、綱封藏白檀九面觀世音菩薩立像

全長一尺二寸九分の香木像にして、技巧の精妙殆んど其極に達し、髻飾瓔珞の微細に至るまで、刻鏤餘すなく、眉目の端正姿態の莊嚴齊として丈六尊像を凌ぐの觀あり。是れ獨り檀像として珍なるのみならず實に彫像界の稀覩たり。

三〇、綱封藏木心乾漆彌勒菩薩坐像光背

奈良朝彫塑界の一異彩として、此種藝術に於ける練熟の範を示せるものは此光背なり漆泥のみを用ゐて雲鳳花文を現せる妙技實に當時の遺品に比儔を絶す、その高二尺二寸九分徑一尺四寸二分なり。

三一、綱封藏金銅押出阿彌陀三尊像

三尊像の總高一尺二寸九分、彫刻の樣式手法純乎たる唐式にして、我天平の頃其原型を唐より傳へて以て製作せしものに非ざるか、厨子は總檜塗漆造りにて樣式手法全然類例を絶し、誠に心憎きまで蕭灑にして崇高なるものなり。

三二、綱封藏百萬塔

孝謙天皇天平寶字八年惠美押勝の亂平ぎて、罪障消除福壽無窮の御祈願のために百萬基の小塔を造り、東大、法隆を始め天下の十大寺に各十萬基づゝを施入し給ひしもの、今は只だ法隆寺に存するのみなり。

三三、綱藏封百萬塔內陀羅尼

百萬塔內に納めたるは、無垢淨光大陀羅尼經中の根本、相輪、自心印、六度の四咒なりとす。現存せる世界最古の印刷にして眞に我國の誇と云ふべし。塔中の陀羅尼殆ど銅版印刷のものゝみなるが中に、肉筆のもの三卷を存せるは又以て珍とすべし。

三四、綱封藏木彫赤漆獅子頭

伎樂用として存せるも其仕樣傳はらず、檜材に布を貼り漆を塗り彩色を施す、長さ一尺二寸と一尺一寸九分との二面あり、面貌發動の妙を現じ、眞に東大寺のそれと相並びて本邦獅子頭中の双璧なりとす。

三五、綱封藏獅子狩文樣錦

此の錦はもと西域より支那に傳へられたる虎頭連璧錦と同じく、支那人の織成せるものなるべし。所謂ササン朝の文樣を有し、東西文明の交涉を證明すべき貴重なる資料たり。されど我が將來の年代詳かならず。

三六、絹本着色孔雀明王畫像

本像は曾にその古名畫たるのみならず、沈着莊重の趣致に富み、密敎儀相上の參考史料たるべき價値あるを以て天下の絕品と稱せらる、竪三尺八寸五分、幅二尺六寸七分願ふに天平の頃入唐將來の底本に依り移寫したるものに非ざるか。

三七、献納御物聖德太子御製法華經義疏

我國に於ける佛典注疏の最初のものにして、筆蹟としてまた唯一最古のものなり、特に太子の御起草あらせられし稿本たるに於いて尊き事限りなし。全四卷總長百九十二尺六寸、幅八寸二分五厘黃色紙を用ふ。

三八、献納御物紙本着色聖德太子及二王子御影

太子の御影は古來雕塑に繪畫に其類多しと雖、太子生身の御影と傳へらるゝ點に於て本像は眞にその最高權威たるのみならず、又實に服飾史上貴重なる位置を占む。左は山背大兄王右は殖栗王と傳へられ、一に唐本の御影とも稱し阿佐太子の筆といふ。

三九、献納御物摩耶夫人及婇女群像

法隆寺の草創と極めて近接せる時代の製作にして、佛教藝術最初の樣式に屬し釋尊降誕の群像なり。一群四軀の連鎖緊密にして、湊合の妙を發揮せる千載稀覯の名品なり像の高さ大は三寸五分、小は二寸三分なり。

四〇、献納御物貝多羅葉心經及尊勝陀羅尼梵本

貝多羅葉梵文二片は本邦現存の梵文中最古の脊來に係り、眞に梵文研究家を益すること多大なるものあり、梵文經文の最後に悉曇十四音を附す。元祿年代悉曇學の大家釋淨嚴、これが譯文を作り今共に御府に藏せらる。

四一、献納御物金銅彌勒菩薩像

總高一尺八寸七分五厘、臺座高さ四寸五分、其臺座の框緣に刻せる銘に依り推古天皇の十四年たるを明かにす、技法又頗る原始的意義に富み、眞に本邦傳存の造像中最古佛像の一たり。一に如意輪觀音と傳稱す。

四二、献納御物金銅觀世音菩薩立像

總高一尺二寸九分、臺座の框名を以て著名なれど、其銘の「辛亥年」に二說あり、一は百濟觀音を髣髴せしむる形式技巧の點より崇峻天皇の四年とし、一は其樣式の圓熟鑄造法の發達せる時期に鑑み孝德天皇の白雉二年とす。

四三、献納御物金銅灌頂幡

幡の古制を徵すると共に莊嚴美を極めたるものは、東亞を通じて恐らく此一品あるのみ、全長十七尺、大垂幡の幅一尺九寸、小幡の幅三寸七分五厘、金銅製の薄板に文樣な彫り透し、更に筋彫を加へたるものにして實に稀世の珍寶なり。

四四、献納御物牝馬龍頭水瓶

太子の御使用あらせられしものにて、頸周り三寸三分五厘胴周り一尺九寸三分白銅製にして銀色漂ふ、その龍頭龍身及線彫の牝馬と底部とは金色を呈し、龍眼は練玉を嵌し、丸鈑は純金を用ふ、其意匠の卓落形式の整美洵に天下無二の名器なり。

四五、献納御物法隆寺献物帳

青麻紙にて横二尺三寸五分縦九寸二分五厘、聖武天皇崩御の後、孝謙天皇が追善のため、先帝御遺愛の珍什を東大寺初め十八ヶ寺へ分納あらせ給ひし時の勅書にして、現存せるは東大寺以外唯法隆寺にこれあるのみ。

四六、献納御物蓬萊山蒔繪袈裟箱

現存せるは蓋のみなり。竪一尺六寸六分五厘横一尺三寸八分五厘高さ一寸七分、地は黒漆に金粉を蒔き、表は松喰鶴の亂飛、裏は龜背に立てる蓬萊山の圖を金銀を以て蒔繪したるものにして、繪畫的趣味を發揮す、天仁前後の作ならんか。

四七、献納御物黒漆螺鈿鳳凰紋唐櫃

櫃身の高さ一尺四寸三分（幅三尺六分奥行二尺二寸五分）に對する三分の一徑の大紋を巧みに散らしたる、手法の勁拔意匠の大膽殊に珍とすべく、地は黒漆なれど粗らに散れる金粉の幽光を放ちて趣致に富み、實に鎌倉時代製作中の白眉たり。

四八、献納御物梨子地黒漆塗片輪車蒔繪手箱

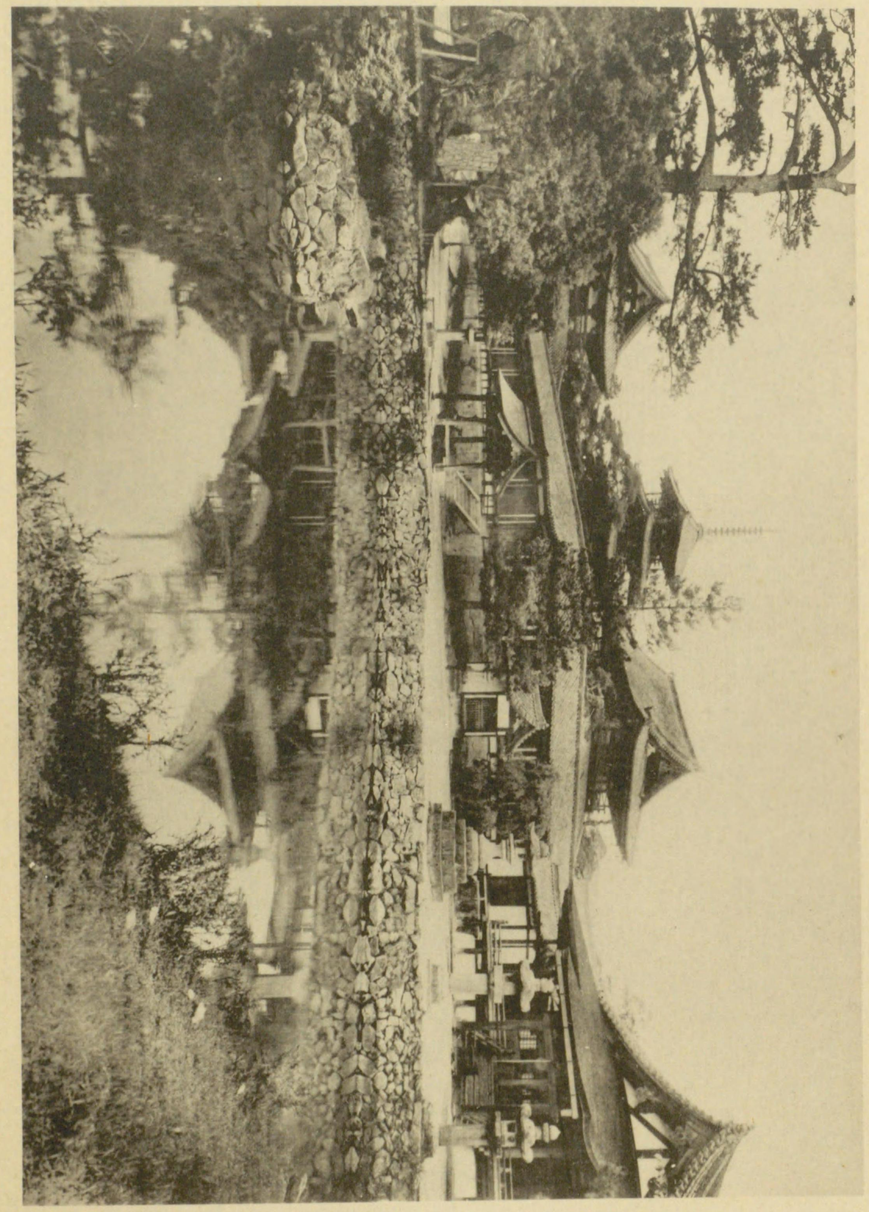
縁に錫を伏せたるも今は殆んど腐蝕す。外側は總べて波に片輪車蓋裏は草花に小鳥の散し蒔繪を施せり、其手法より足利時代の作と稱せらる。蓋竪一尺二分横七寸四分五厘深さ二寸四分五厘身の深さ三寸五分なり。

四九、献納御物木彫伎樂面

奈良朝伎樂に使用せられたる面にて、木彫の外に夾紵製の面もあり、本面竪九寸五分幅六寸五分刀痕香しく雅趣饒かなり。以上献納御物とあるは元法隆寺の藏にして、明治初年同寺より献納し御府の藏となりたるものゝ概稱なり。

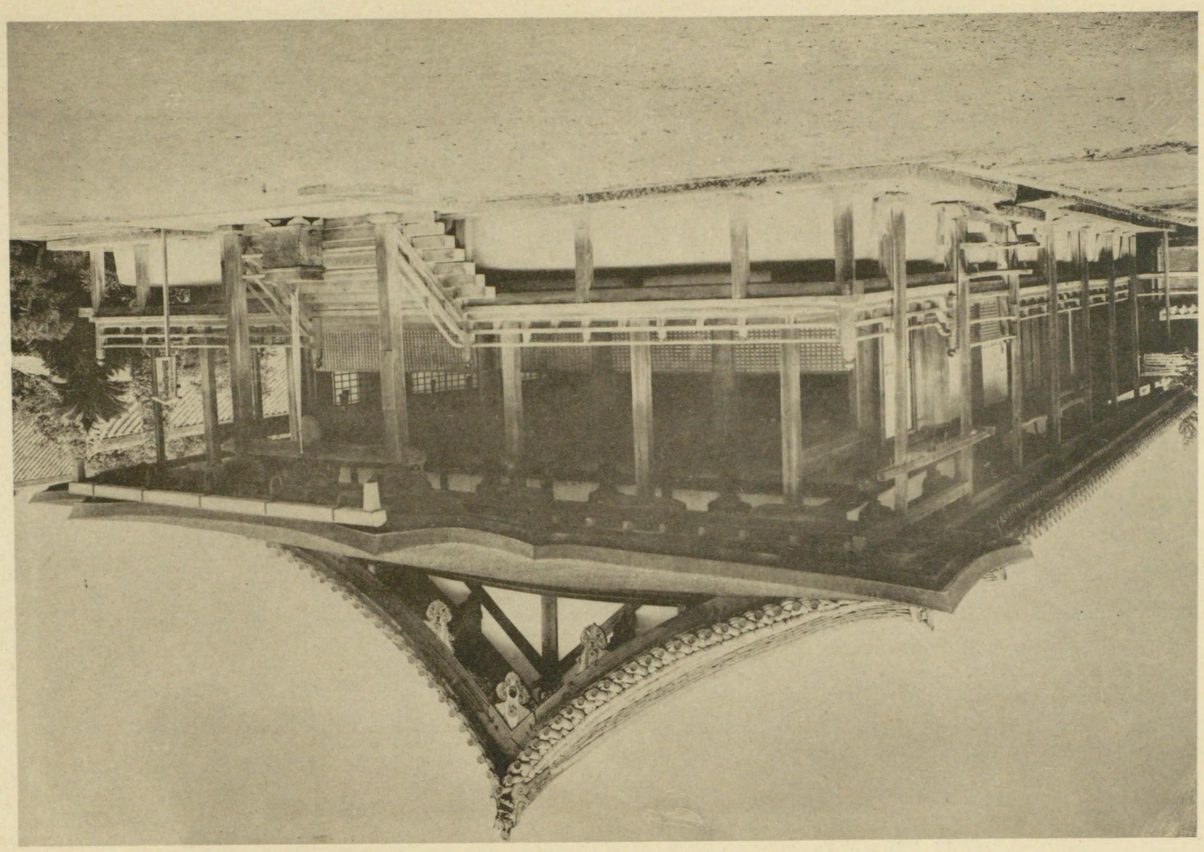
五〇、聖徳太子磯長御廟

河内國磯長叡福寺境内に在り。兆域の面積六百七十九坪餘周回百五間餘の圓墳なり。世に三骨一廟と稱ふ。結界石苔むして動ぎなく大乘木の翠長へにして靜寂を極む、こゝに太子の聖靈は御母間人皇后と王妃と共に永遠に眠らせ給ふなり。（主事山岡超舟記）

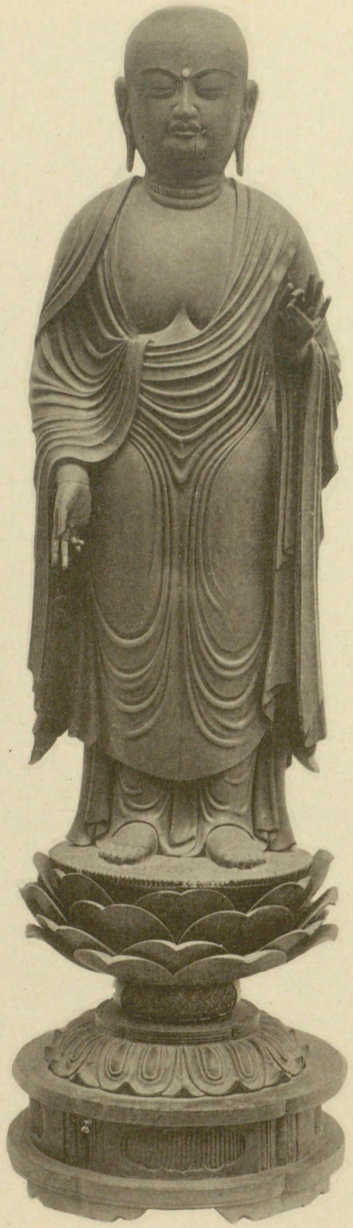


觀外藍伽寺隆法　第一

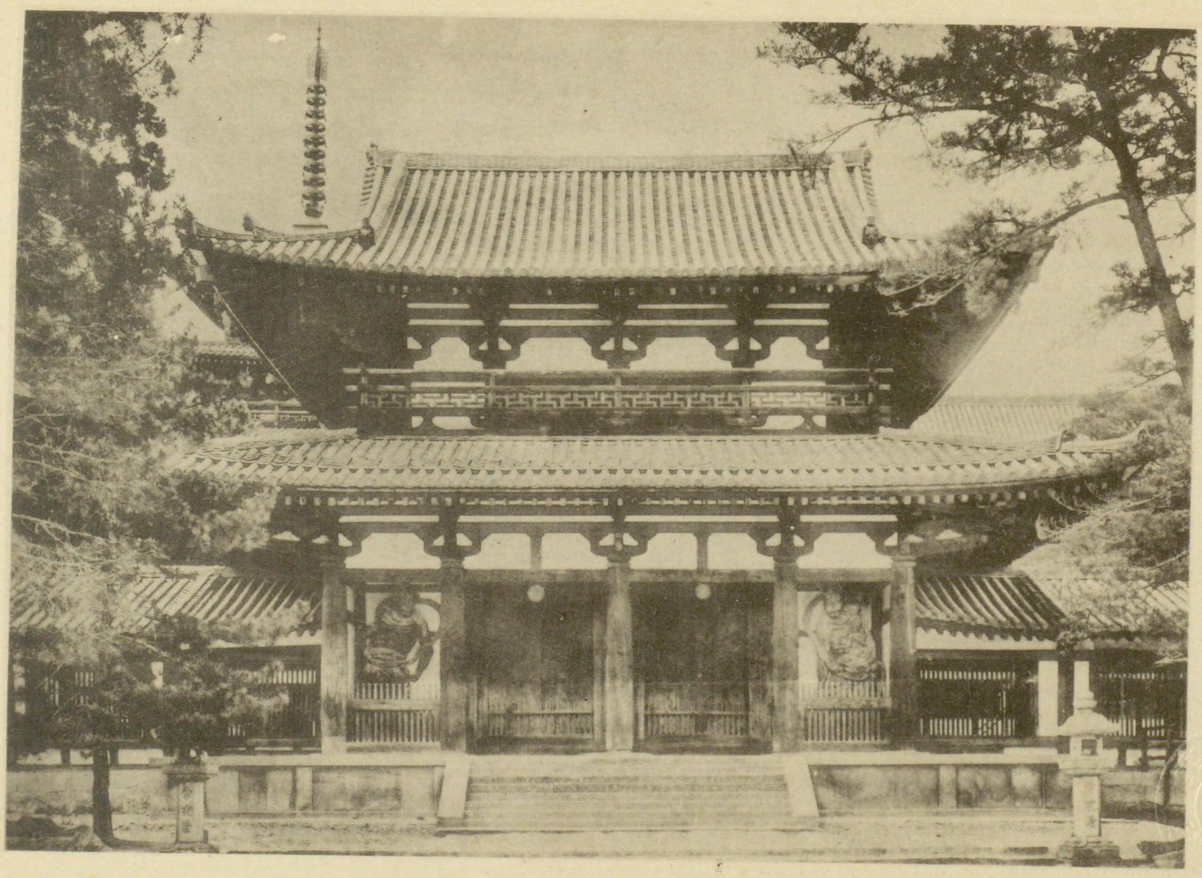
本帖題字は、
本會總裁久邇宮邦彦王殿下の賜ふところにして、實に聖德太子の十七條憲法第一條最初の一句なり。



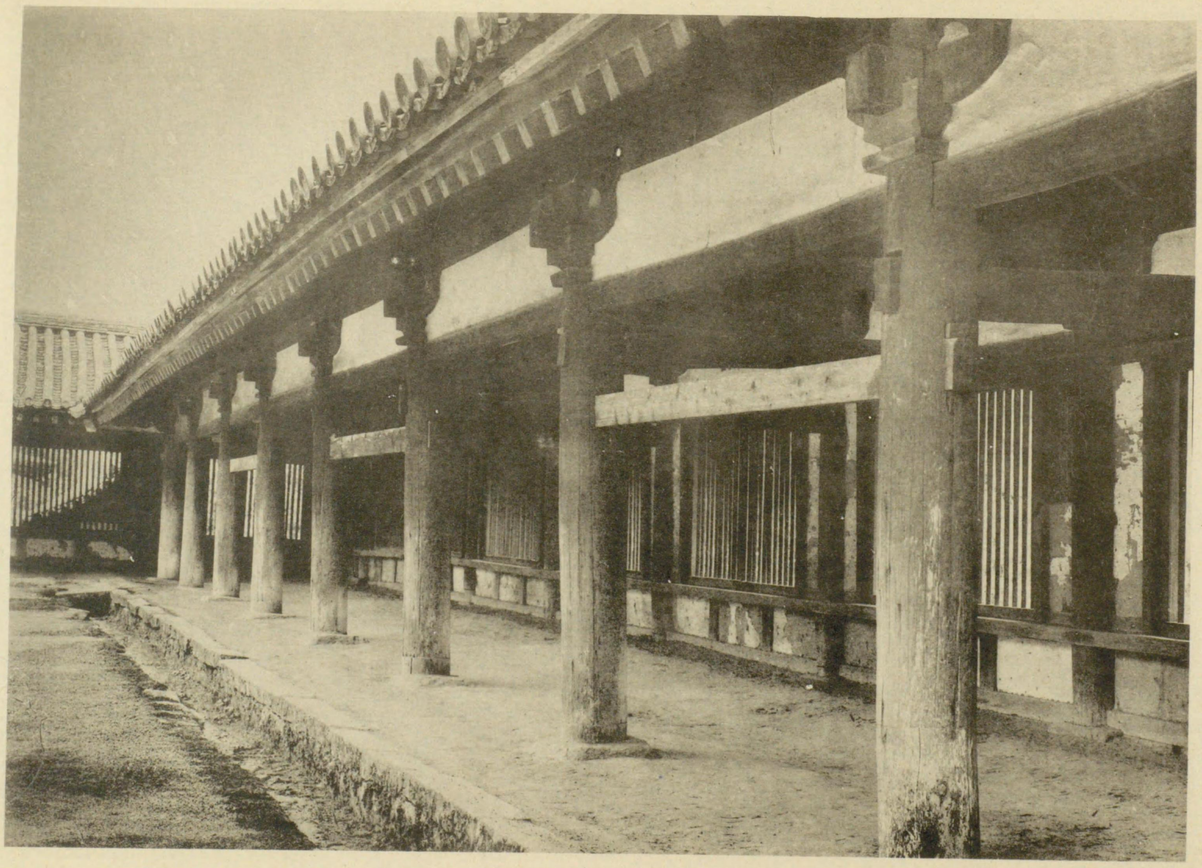
聖靈院本尊木彫聖徳太子坐像



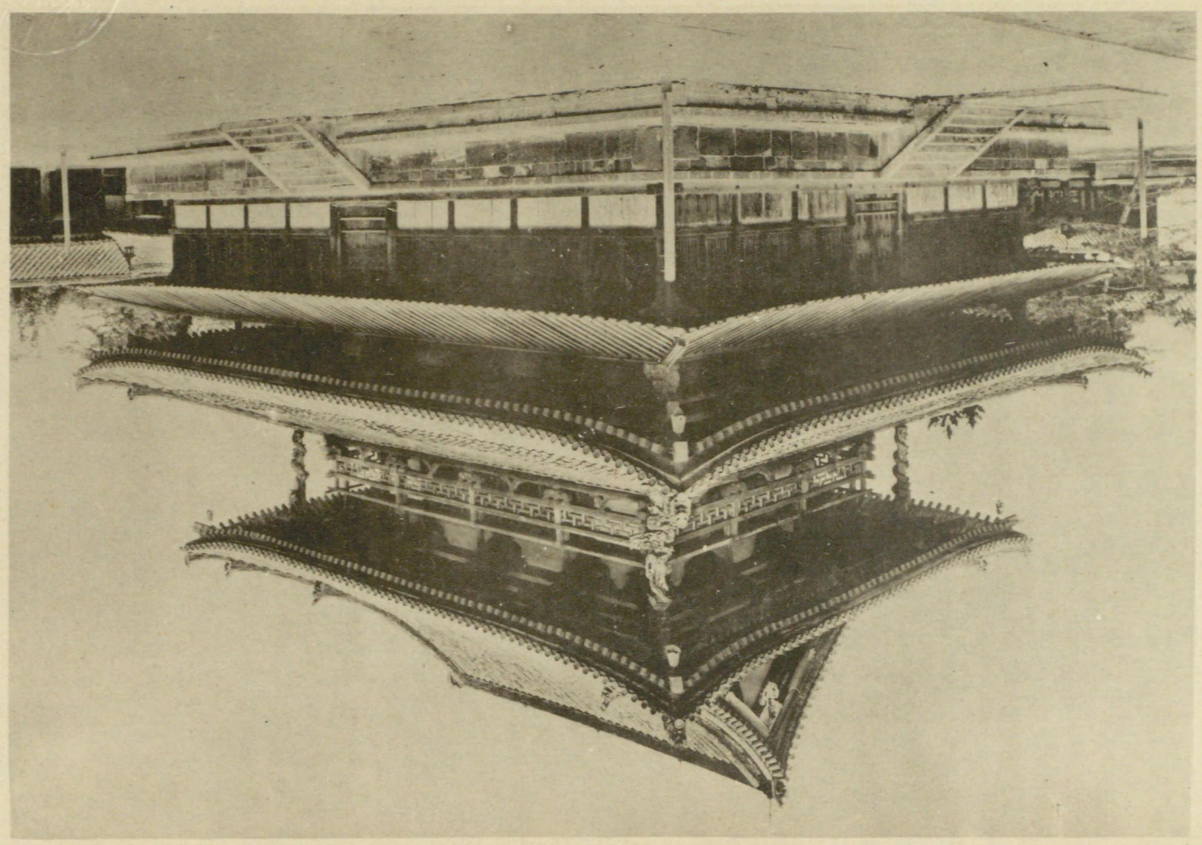
聖靈院木彫地藏菩薩立像



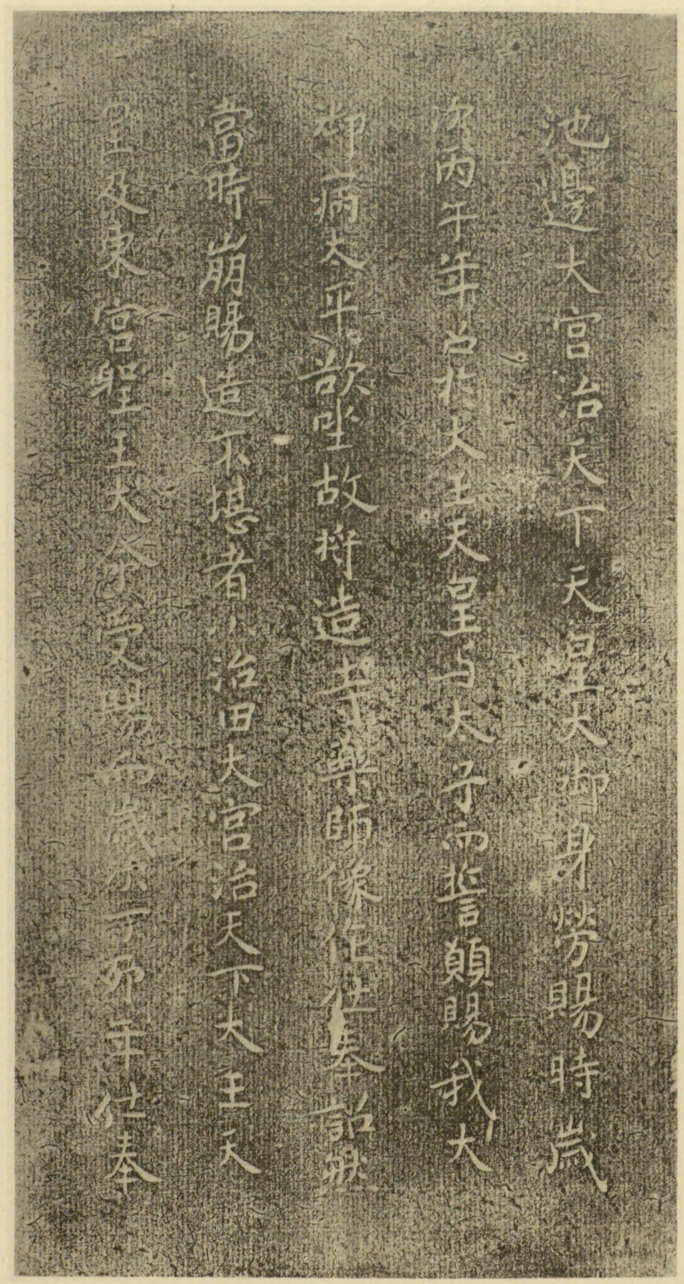
中門　五



圖版六

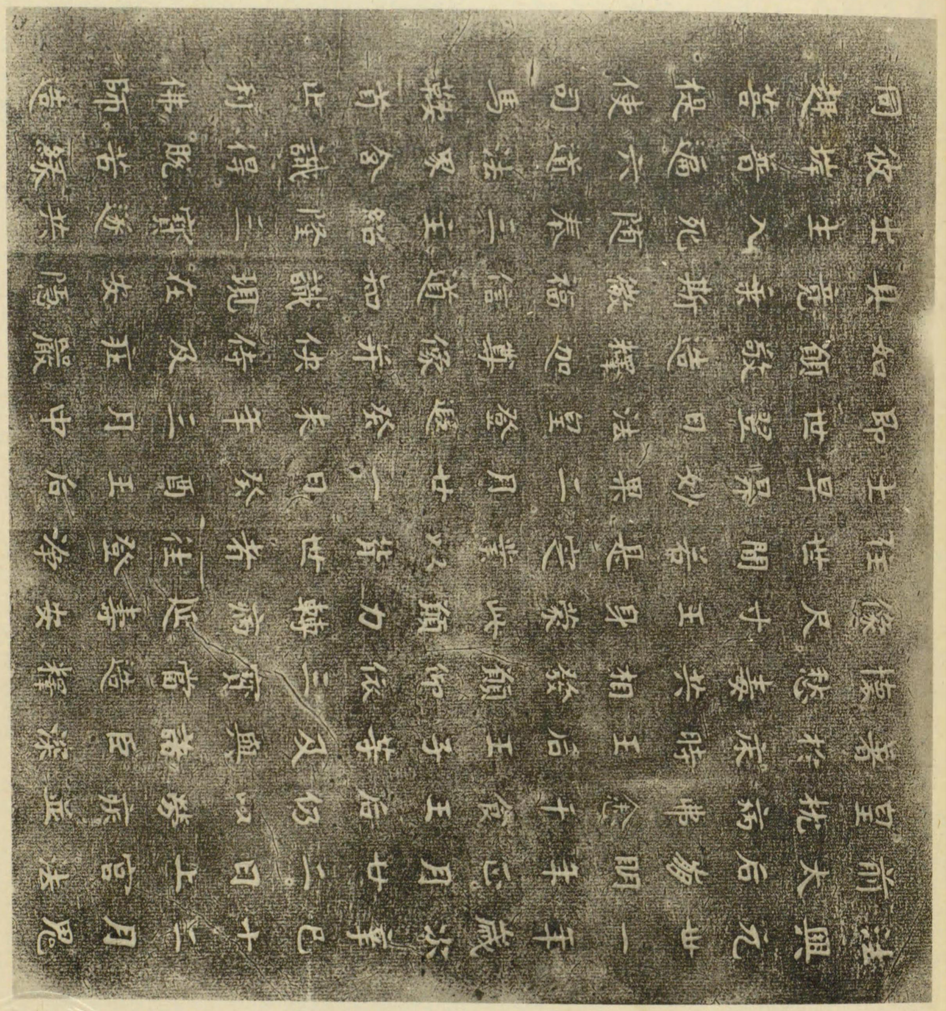


金堂本尊金銅藥師如來坐像



池邊大宮治天下天皇
丙午年召大王天皇与太子而誓願賜我大
御病太平故將造寺藥師像作仕奉詔勅
當時崩賜造不堪者治田大宮治天下大王天
皇及東宮聖王大命受賜而歳在丁卯年仕奉

金堂金銅釋迦如來坐像及兩挾侍立像



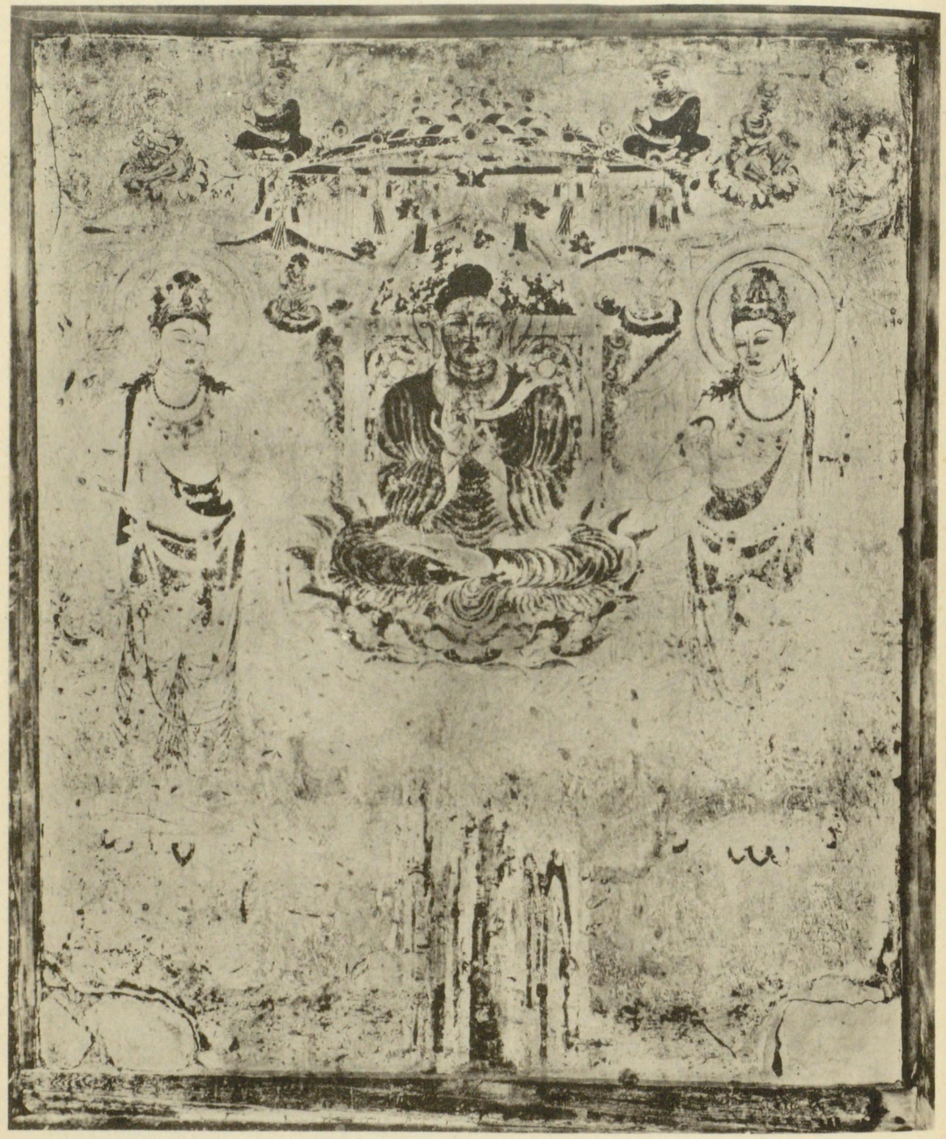
法興元世一年歲次辛巳十二月鬼
前太后多明年正月廿二日上宮法
皇枕病弗念千食王后仍以勞疾並
著於床時王后王子等及與諸臣深
懷愁毒共相發願仰依三寶當造釋
像尺寸王身蒙此願力轉病延壽安
往世間若是定業以背世者往登淨
土早昇妙果二月廿一日癸酉王后
即世翌日法皇登遐癸未年三月中
如願敬造釋迦尊像并俠侍及莊嚴
具竟乘斯微福信道知識現在安隱
土生入死隨奉三主紹隆三寶遂共
彼岸普遍六道法界含識得脫苦緣
同趣菩提使司馬鞍首止利佛師造

金堂金銅釋迦如來坐像光背銘文

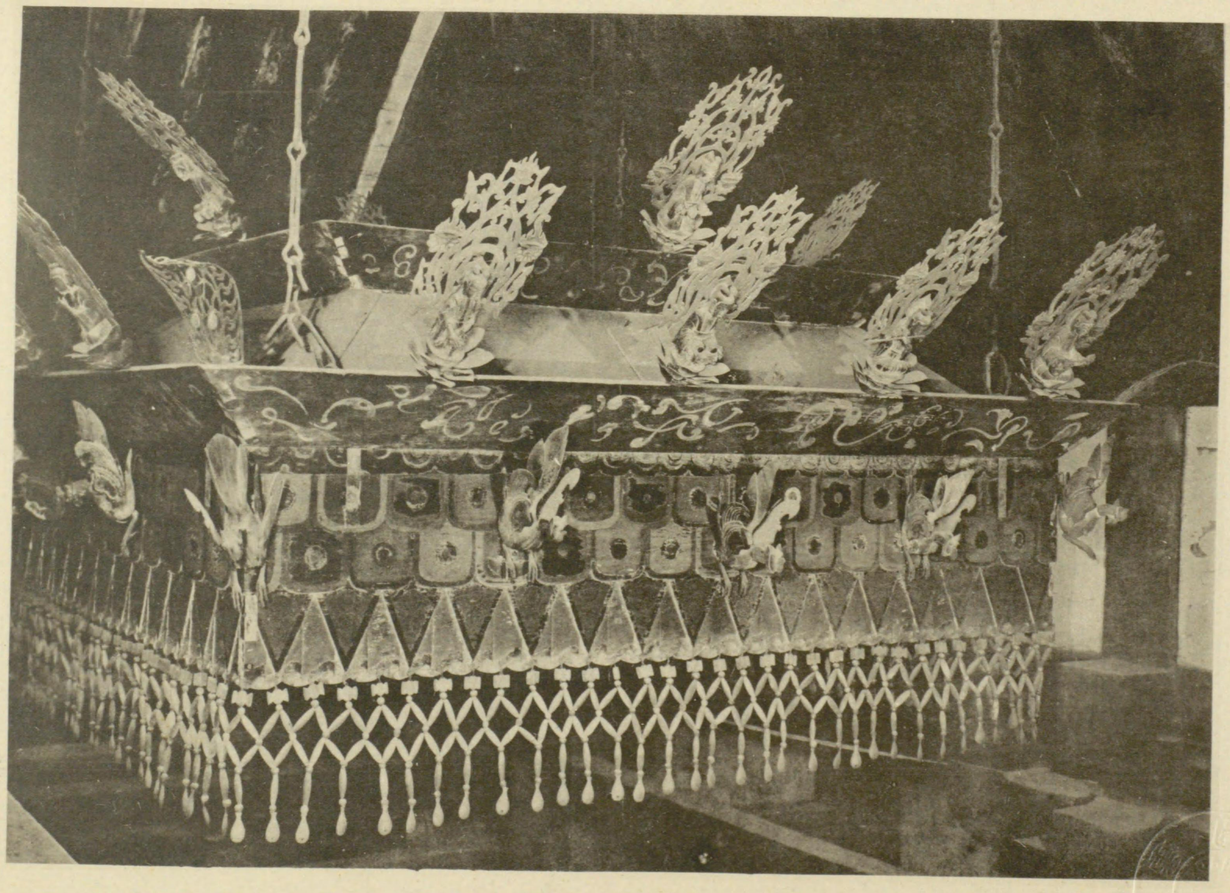
金堂木彫着色觀世音菩薩立像

金堂木彫着色多聞天王立像

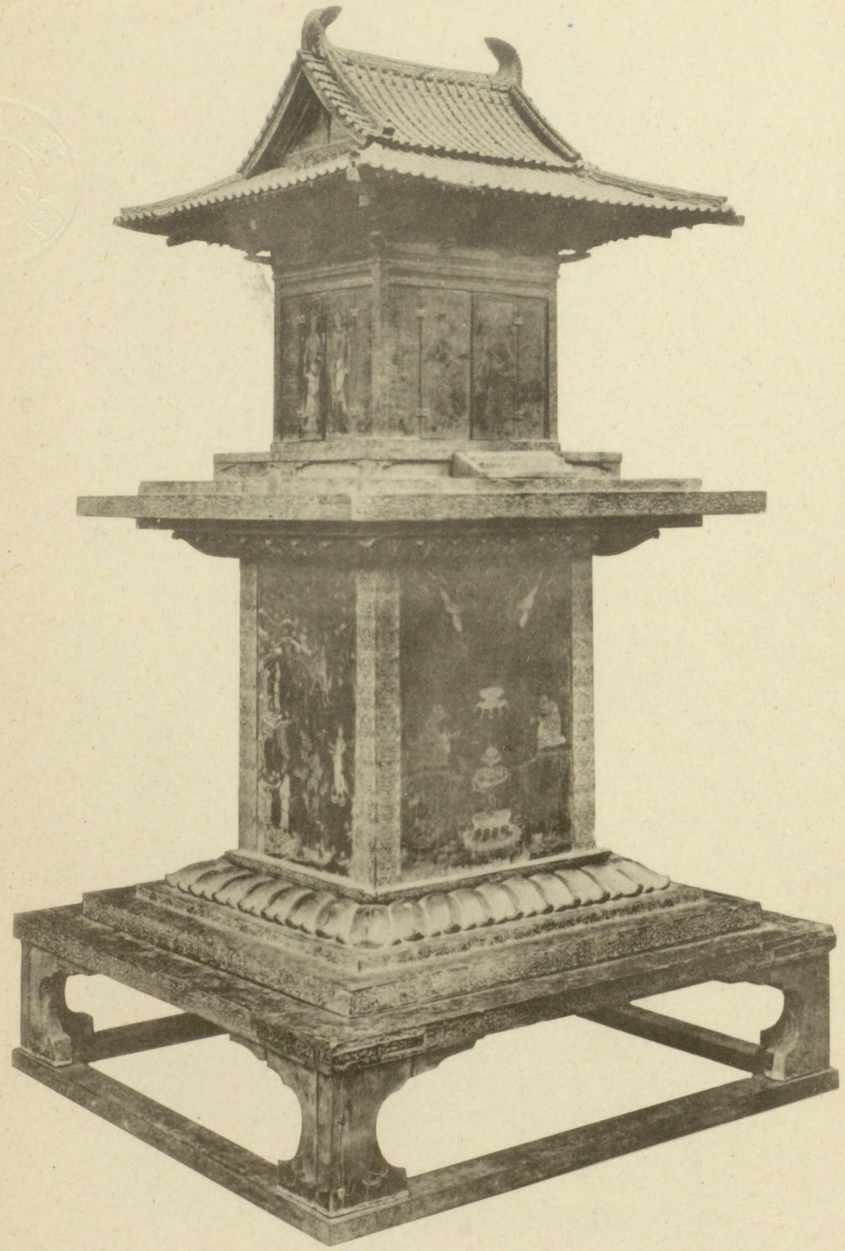
金堂木彫彩色吉祥天立像

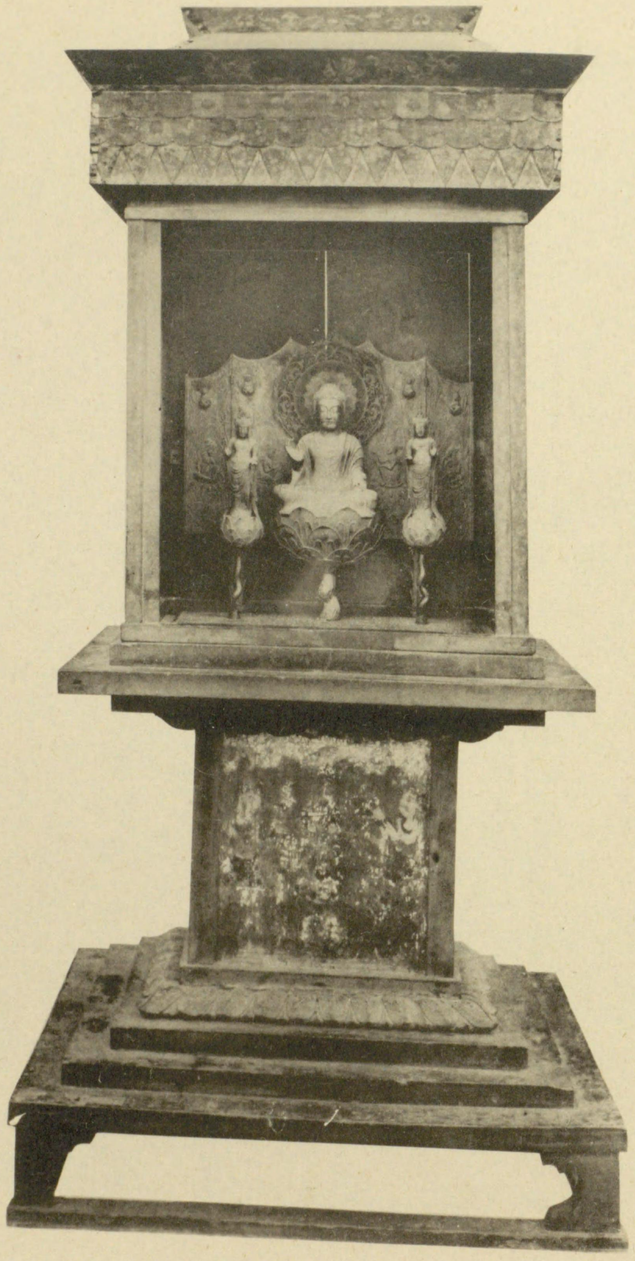


金堂西面大壁々畫



金堂天蓋飛天及鳳凰

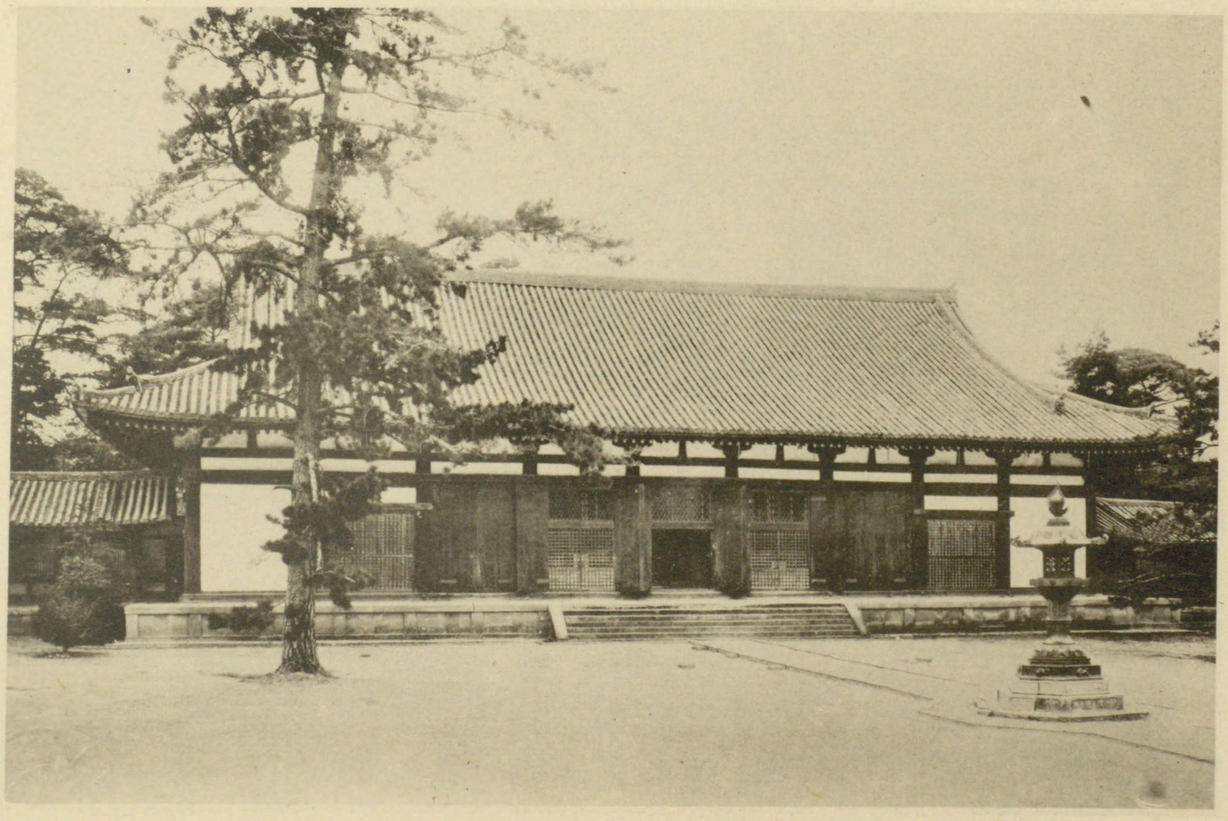




一九　五重塔

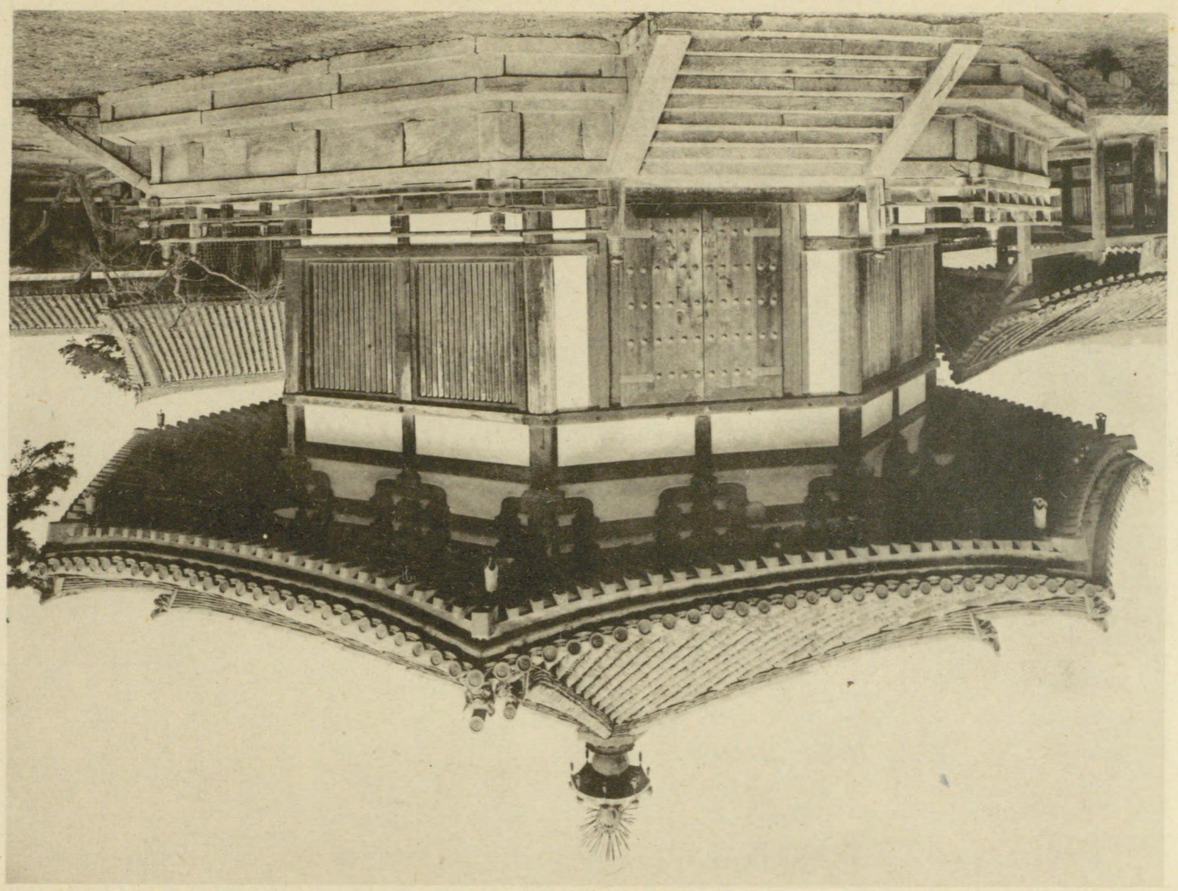
五重塔塑着色菩薩坐像

五重塔塔婆維摩居士坐像



講堂　二二

講堂本尊木彫漆箔藥師如來坐像



夢殿本尊木彫漆箔觀世音菩薩立像

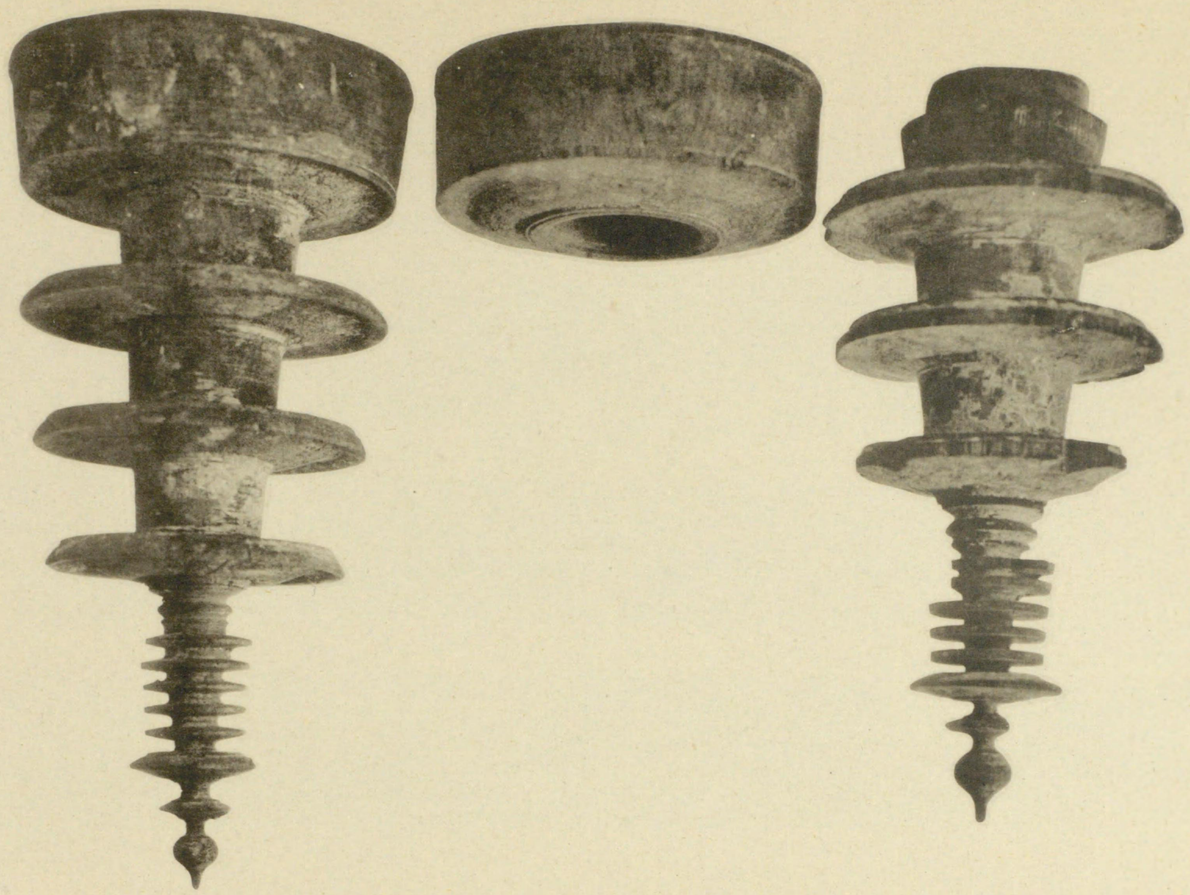
相殿木彫着色聖徳太子七歳御影

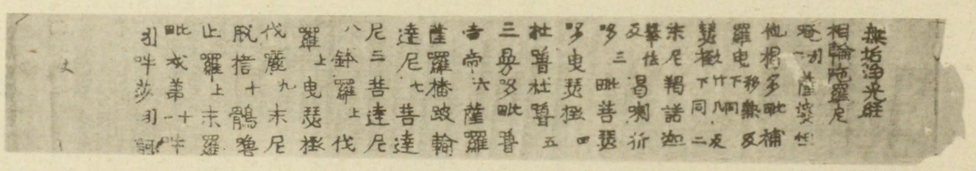
繪殿金銅觀世音菩薩立像

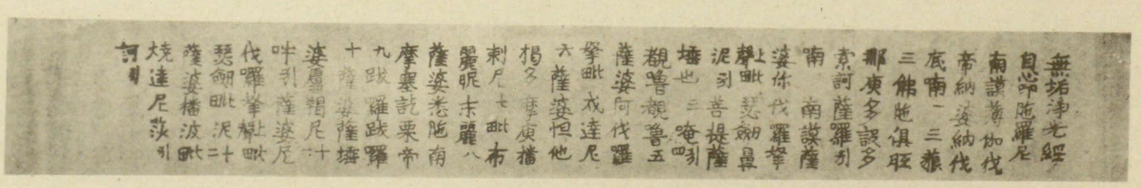
綱封藏絹本着色聖德太子孝養御影

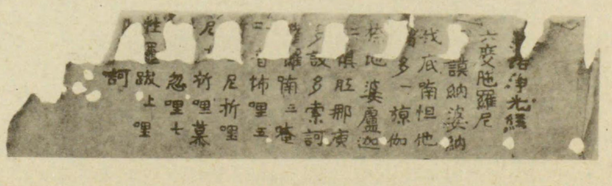
絹封藏白檀九面觀世音菩薩立像

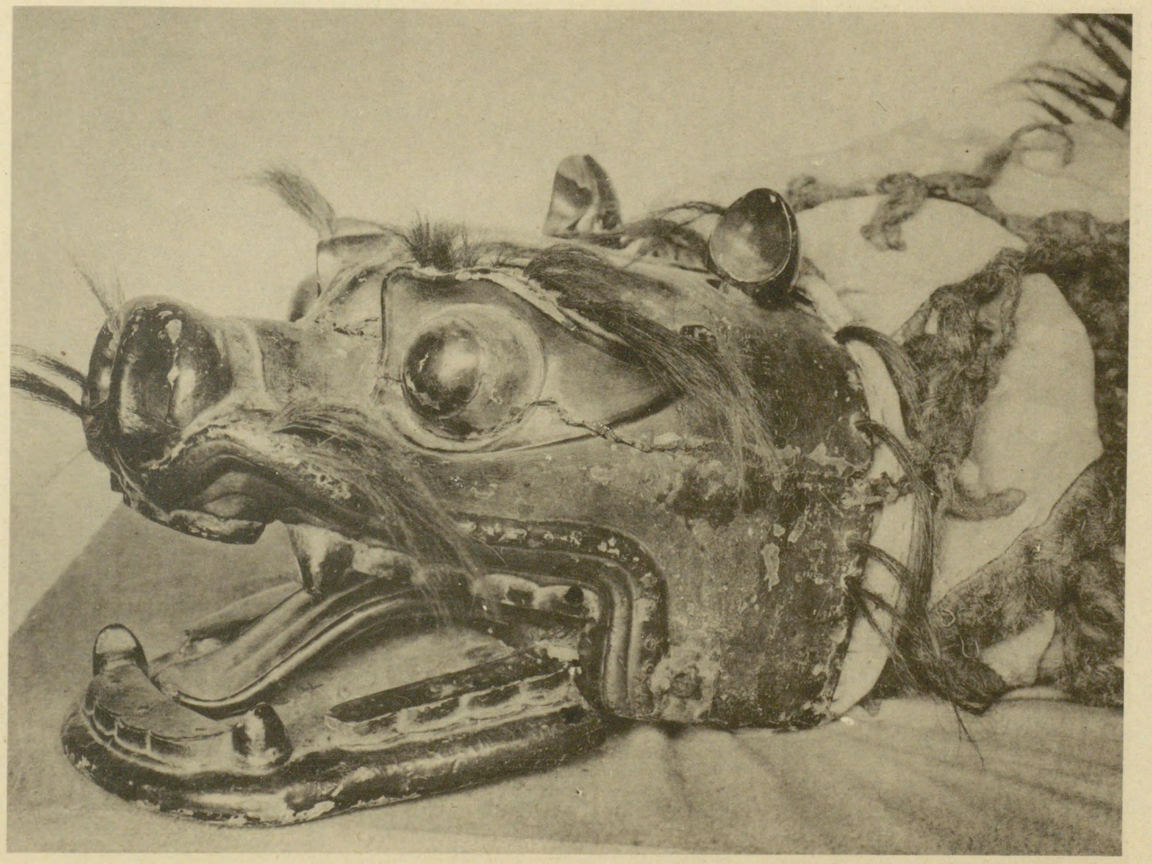
綱封藏金銅押出阿彌陀三尊像



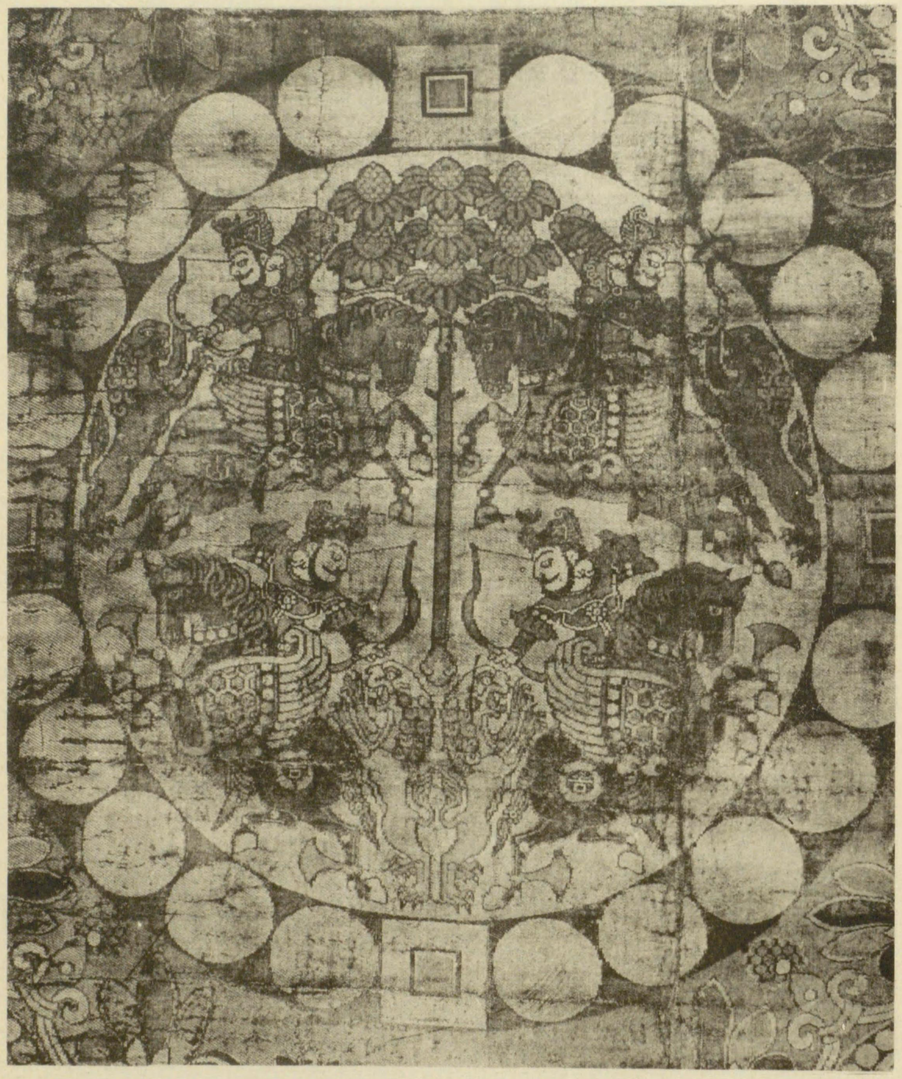








頭子獅漆赤彫木蔵封綱　　四三



錦樣文狩子獅藏封綱

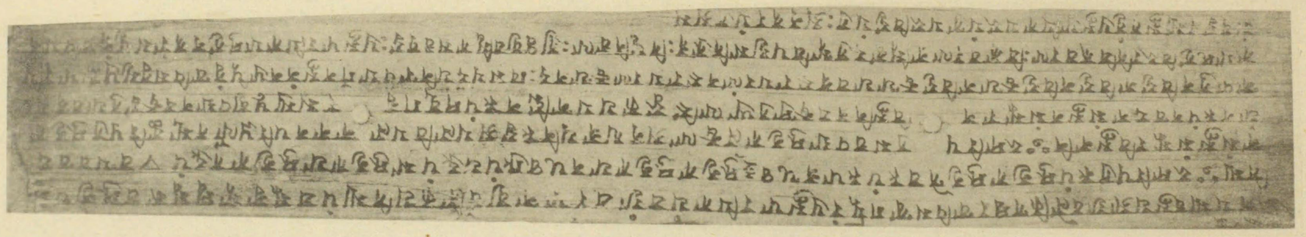
絹本着色孔雀明王畫像

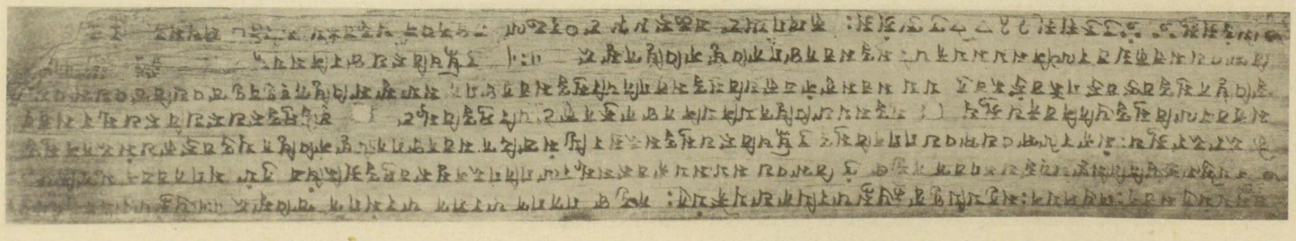
法華義疏第一

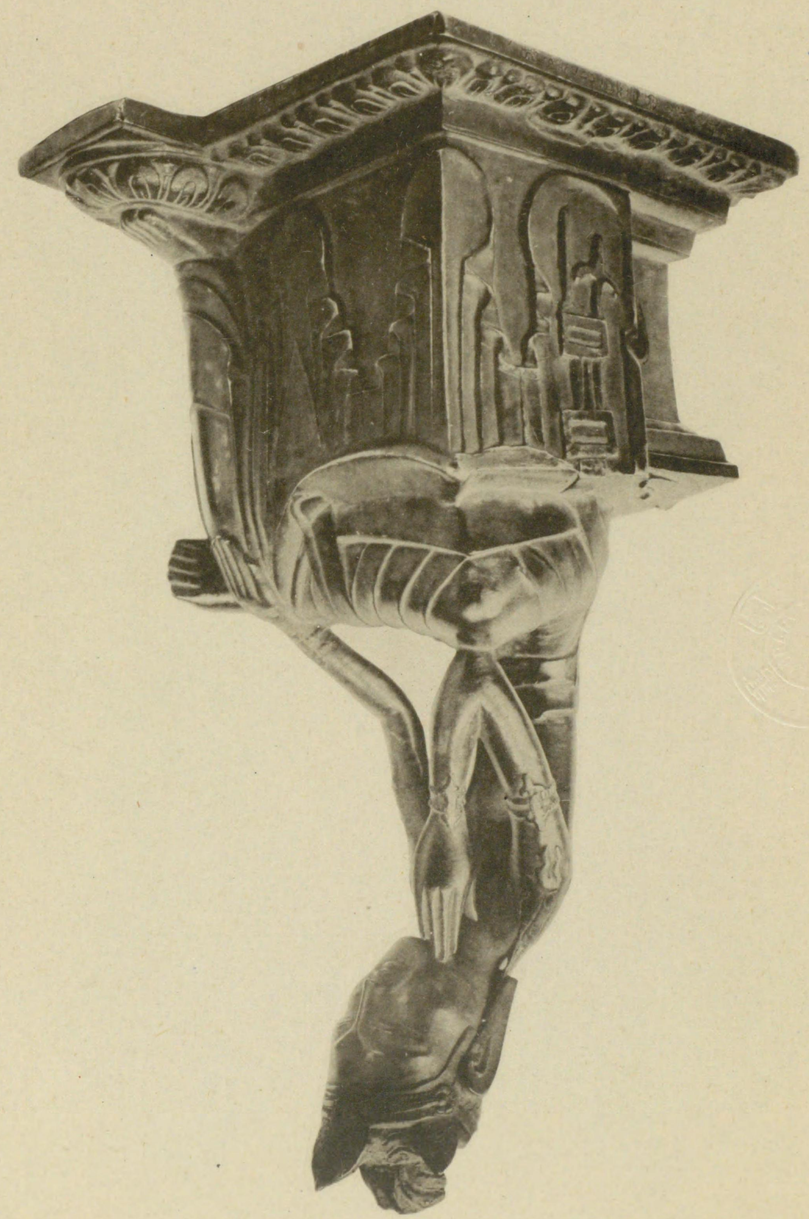
此是 大委上国宮王秘集 非海彼本

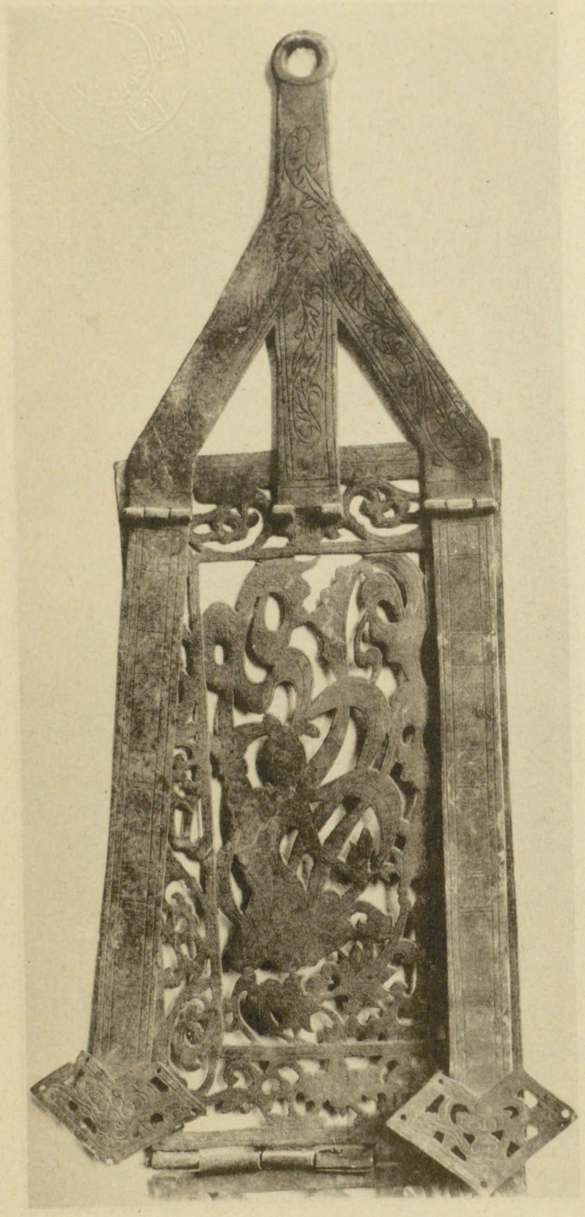
夫妙法蓮華經者蓋是總取方善合為一回之豊田七百近
壽轉成長遠之神藥若論迦釋如來應現氏長之大意者
時欲宣濁氏經教循同歸之妙因令得莫二之大果但衆生
宿殖善微神圖根鈍以五濁鄣於大機六弊猶其慈眼卒不
可聞一乘同果之大理所以如來隨時而宜初就鹿苑開三乘之
之別疏使威各趣之近果從氏以來雖復平說无相勸同循或
以中道而褒貶猶以三回別果之相養育物機於是衆生歷歷
年累月蒙教循行漸漸益解至於王城始教大乘機稱會如
來出世之大意是以如來即動方德之嚴軀開真金之妙口廣以
方善同歸之理使得莫二之大果妙法者外国云薩達摩然妙
是絶慮之号法即氏經中所說一回一果之法也言氏經中所說
一乘同果之法超然絶於昔日二乘同果之鹿故稱妙 蓮華

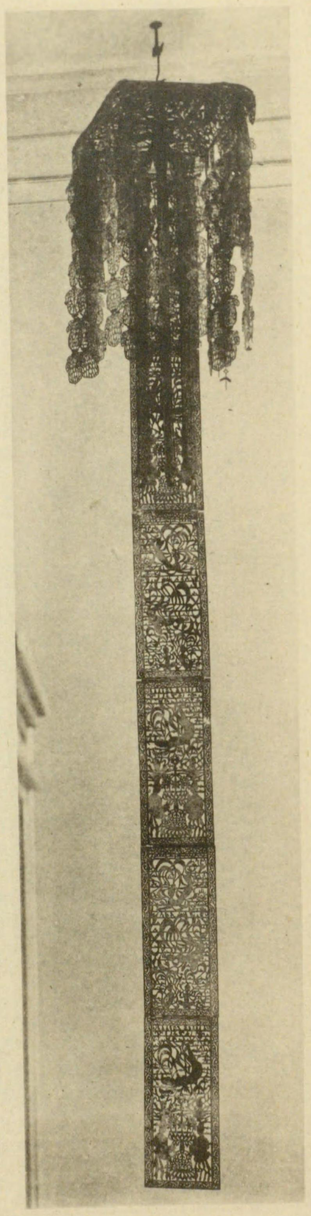
獻納御物摩耶夫人及婇女群像



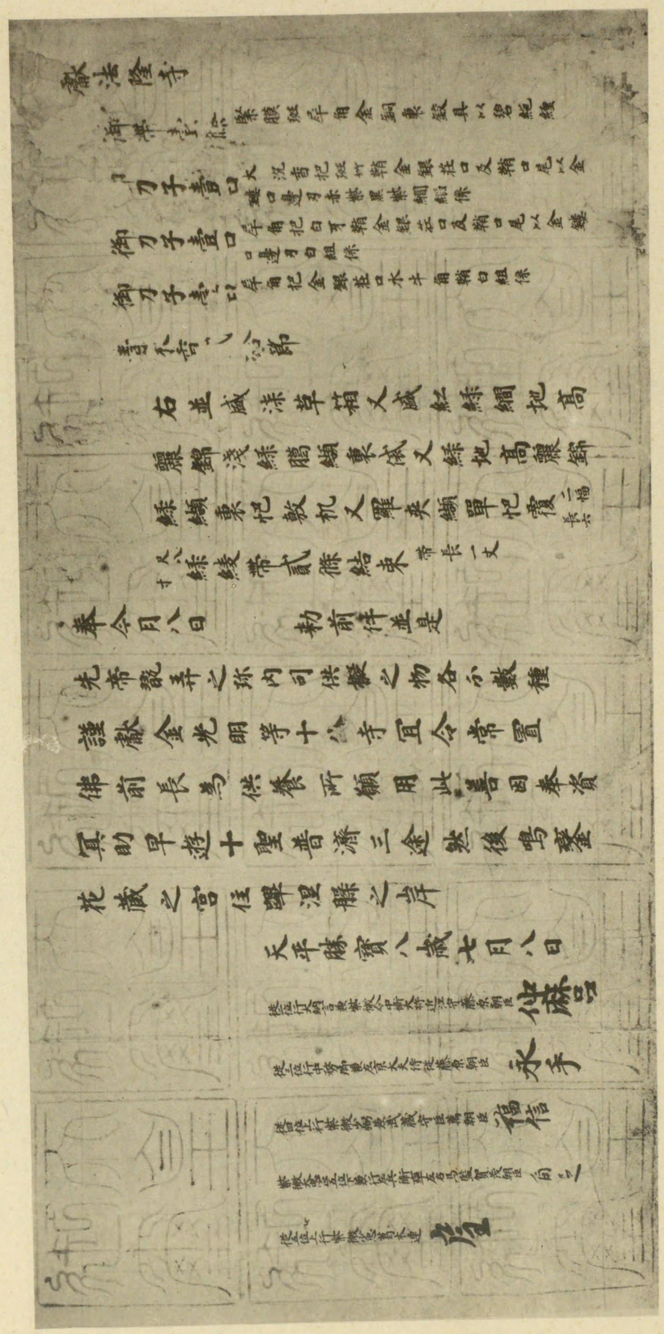


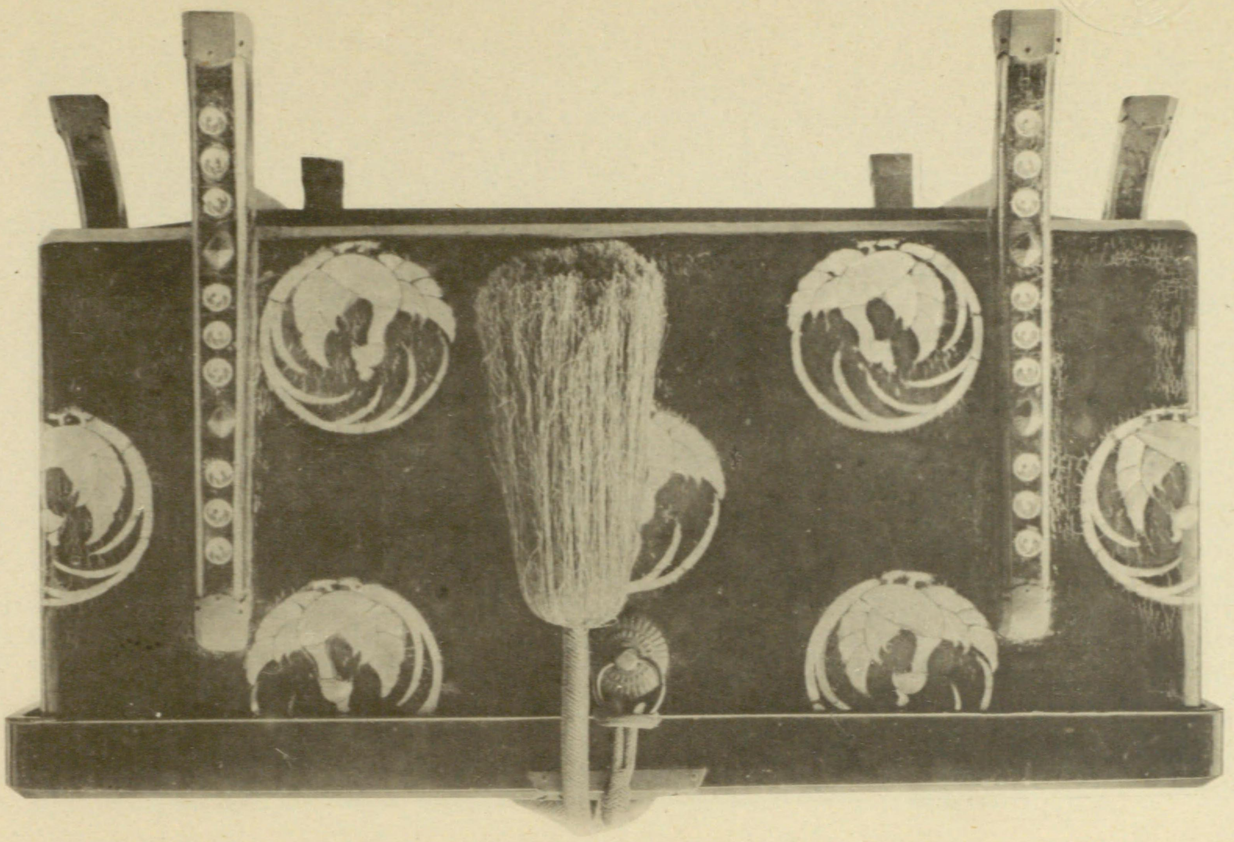


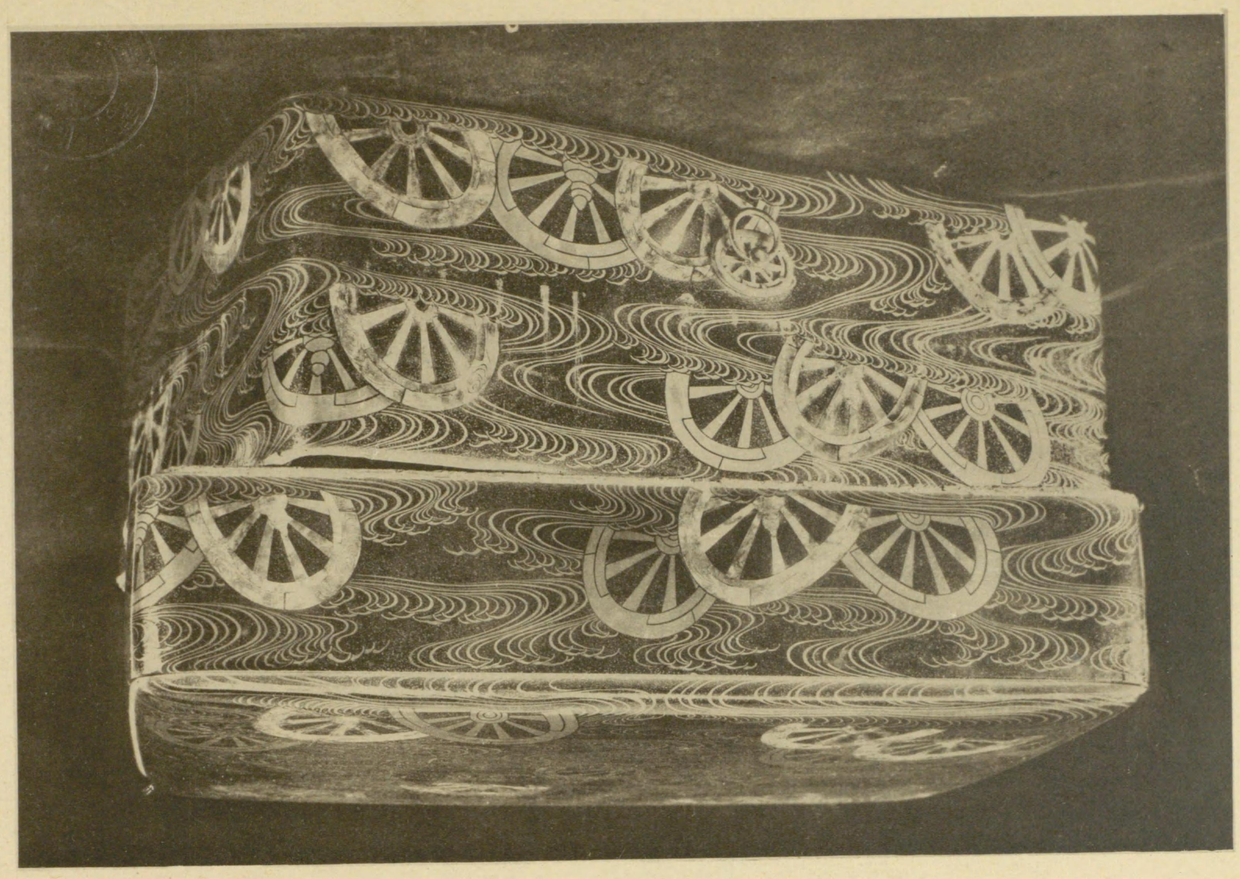


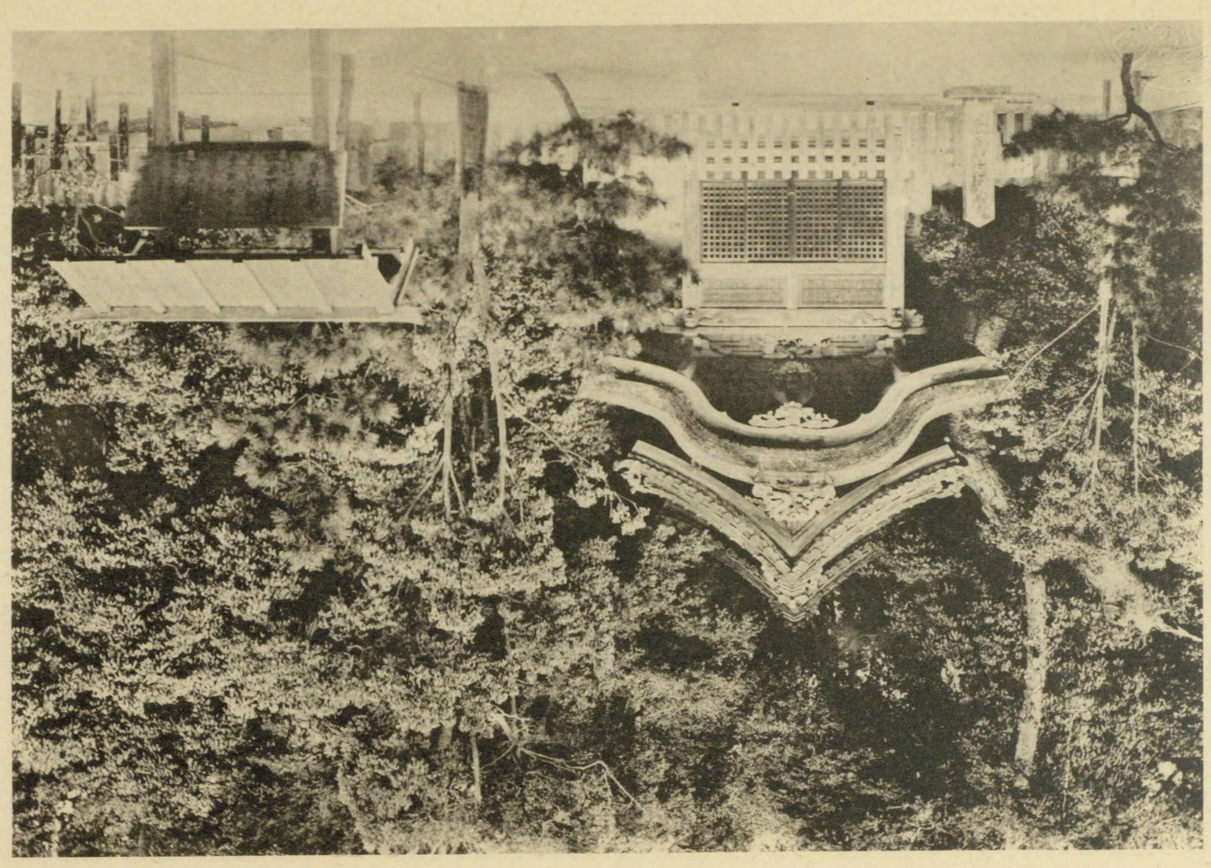


獻納御物牝馬龍頭水瓶


獻法隆寺
御帯壹條 緑腰紙牟角金銅裝具以皮紙縫
御刀子壹口 大唐呂浪子作鞘黒漆細紐條
御刀子壹口 牟角把白玉鞘金銀荘口及鞘口尾以金鏤
御刀子壹口 牟角把金銀荘口水牛角鞘口組條
書不吉、八、部
右並威涅草箱入威紅絲細把高
羅鸂浅絲腨嫺裏成文絲地高羅錦
絲嫺裏把紋机入罹夾縁單帋覆二幅長
八絲綾帶貳條結束帶長二丈
奉
月八日
勅前件並是
先帝靈奉之弥内司供養之物各分數種
謹獻金光明等十六寺宜令常置
佛前長為供養所願用此善田奉資
冥助早遊十聖普濟三途然後鳴蹩
花蔵之宮往攀涅槃之岸
天平勝寶八歳七月八日
佐伯宿禰今毛人
佐伯宿禰永手
佐伯宿禰麻呂
佐伯宿禰福信
佐伯宿禰鷹主







大正十二年三月八日印刷
大正十二年三月十一日發行

不許複製

著作兼發行者　聖德太子一千三百年御忌奉賛會
右代表者　東京市麹町區三年町一番地　山岡超舟
印刷者　東京市芝區南佐久間町二ノ一四　渡邊素一
東京　内外印刷合資會社印行

162
73

東國書籍

國立中央圖書館藏